



原町幼稚園の教育

* 2018改定保存版 *

原町幼稚園の教育を木の成長にたとえれば・・・
へんにかたにはめて曲がった枝をつくったり
やたらに支えてひ弱にしたり
肥料をやりすぎて根っこがくさったり・・・

そんなことがないように
その子のもつ力を、
ありのままの自然体ではつきできるように・・・
でもそれはわがままじゃなくて
みんなといっしょによろこんだり
がまんしたり、たのしんだりするちからも
子どもたちの気持ちの安定と、
課題活動のバランスを考えたカリキュラムを通して
その子が自ら成長するお手伝いをいたします。

そのために私達が実行すること、
実行する方針となる内容の概要がこの冊子には書かれています。
私達の教育方針をご理解いただき、ぜひご家庭でも実践し、子どもたちの
健やかな成長のためご協力下さいますようお願い申し上げます。



ごちねびのなごのおはなし

はらまち

HRAMACHI Kindergarten
est. 1957

《教育目標》

※こんな子ども、こんな人間に育ってほしいという願いです。

なかよく、自分らしく、たくましく

capacity

なかよく = ひろい心



- ・友だちと仲良くできる
- ・思いやりの心を持てる
- ・人の気持ちがわかる
- ・人を信頼できる
- ・やさしくできる
- ・マナーが守れる
- ・自然と仲良くできる
- ・好奇心がいっぱい
- ・新しい経験を受け入れることができる

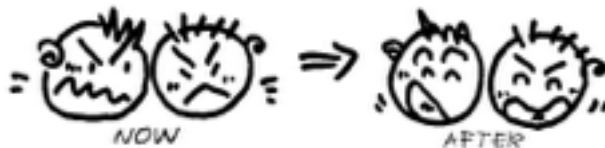
「なかよく」は精神的なキャパシティーです。なかよくという言葉
を幅広い意味でとらえてください。友だちと仲良くするだけじゃあ
りません、地面をちょこちょこ動き回っているアリや、なんとなく
手に触れた木の肌、空を流れる雲、新しく出会った人、新しい経
験・・・自分の周りの人や事象に興味を持ち、受け入れたり、その
場の空気を読みとってスムーズに参加したりすることに抵抗感の少
ない子ども、受け入れる心の広さをイメージして下さい。

人に対する信頼感を根底に、社会でのルールやマナーを身につけて
対人関係もスムーズに適應できる本当の心の広さを持った人を育て
たいと願っています。

他の人を傷つけることに抵抗感を持ち、他人のことを思いやる気持
ち、配慮できる心が育つことをめざします。

◎ 「なかよく」のための経験

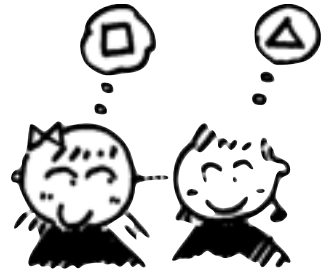
あそびの中で同年代の友だちと、ケンカをしたり仲直りしたりといったぶ
つかり合いや、協力して一つのことを達成すること、そんな経験をしながら
人間関係を学んだり、信頼できる大人との関係（絆）、そして楽しい、
興味深い体験を幅広く積み重ねることによって育てていきます。



personality

自分らしく＝個性を認めあえる

- ・自分が好きといえる
- ・自分の思いつきや考えを言える
- ・自分で考えて行動できる
- ・人と違って良いことがわかる
- ・人が自分と違って認めることができる
- ・人の役に立つことを喜べる



ひょうきんな子ども、活発な子ども、物静かな子ども……いろいろな個性を持った子どもたちが集まって集団生活を送ります。その子ども一人一人が自分を認めてもらい、相手も認めあう、そんな関係を作っていきたいと考えています。

押さえつけられたり言われたからではなく、自分で考えてみんなと一緒に楽しく行動したり、自分の欲求を押さえたり、人のために役立つことを一生懸命やったりする、そんな前向きな選択肢を選べるような、それが喜べるようなパーソナリティーを育てていきたいと願っています。

◎ 「自分らしく」の方向

自由、個性ということばが持ちはやされた時期には、その意味を勝手に解釈して

「自分の勝手でしょ」という風潮もありました。しかし、人間社会で生きていく上で良い個性と良くない個性はあると考えます。

たとえば、不必要な劣等感を持ってしまうと、何をやっても自分はダメだというふうに自信が持たなくなって行動が萎縮していきます。逆に高すぎる自尊心は失敗や恥を避けるあまりに不得意な事から逃げるようになってしまいます。

また、大人の言いなりになって無意識のうちに自分を殺していると、思春期や大人になってからそれが噴出して困ったことになる場合もあります。それらは全て大人との関わりから生まれてきます。大人は、子どものパーソナリティー（個性）を形成するうえで大きな影響を与えるのです。まずは子どもを受け入れ、認めること。そこからその子の自分らしさが始まります。その次の段階は、右へいったり左へいったり、寄り道しながら、その子らしさをより良い方向へ導いていくことです。



positive

たくましく＝意欲がいっぱい

- ・体を動かすことが好き
- ・やりたい！やってみたい！気持ちがいっぱい
- ・自分のできることを次々にふやしていく
- ・失敗してもすぐ立ち直れる
- ・くじけない、がんばる気持ちをもてる
- ・自信を持つ
- ・集中力をつける

チャレンジ精神や勇気、「やってみよう！」という意欲をいっぱい持って行動できる人、積極的な人生を送ってほしいというのが「たくましく」に込められた願いです。



◎子どもの成長は「身体が先行」

子どもの心と身体は大人より密接につながっています。嬉しいことがあるとピョンピョン跳びはねたり、悲しいときには身体を丸めて泣いています。気持ちがすぐに行動に出てくるのです。そして、子どもの発達も心よりも身体先行で進んでいきます。ですから、頭から入る知識よりも身体で実際に体験したことがより心の成長を促すのです。

◎小さな「できた！」が大きな心を育てる

トイレに一人で行けるようになったり、着替えができたり生活面のことを次々とできるようになってくる3歳～4歳。そしてブランコに立ち乗りができたり、鉄棒で前回りができたり、縄跳びがとべたり、運動面での「できた！」「やった！」「楽しい！」という経験が積み重なる5歳～6歳。何かができるようになるたびに子どもは達成感と楽しさを感じ、自信をつけ、ますます意欲がわいてきます。その繰り返しの中でたくましく成長してきます。

私たち大人は一生懸命心から子どもを励ましましょう、そして明るく厳しく、温かく、人生で迫ってくる壁に立ち向かう勇気を持たせて下さい。



《教育方針》

※教育目標を実現させるために子どもの発達側面から教師の関わり方を示したものが教育方針です。
全てのことが子どもの生きる力となるために！

子ども第一主義

- からだ (1) 健康なからだと心を育てます。
- こころ (2) 豊かな心・感性、創造性を豊かにのびします。
- なかま (3) 人への愛情や信頼感、協調性を育てます。
- ちしき (4) ことばを獲得し、知的好奇心や考える力を育てます。
- じりつ (5) 自分をコントロールする力を育てます。

「こどもだって人生だ！」

(このキャッチフレーズに込めた思い)

子どもだって、もう人生は始まっています！
子ども時代に感性を豊かにすることは大人になって音楽を楽しんだり、絵画を楽しんだり、食事を楽しんだり、自分の好きなことを見つけたり、
そして自分が親になったときに楽しかった子ども時代を思い出しながら子育てを楽しむ・・・
そんな、人生を豊かに楽しむパスポートをもらえることじゃないかな、って思うんです。
『たのしい！うれしい！わくわく！』がいっぱいある毎日用意してあげましょうよ！

それを実現させるための方針

- 先生のごほう、親のごほう、いろいろありますが、
第一に子どもの発達にとってプラスになるか、という視点に立って園の活動を考えます。
- 子どもが自ら気づいたり、発見したり、行動したくなる、内発的動機付け*を基本に、
自ら楽しさを創り出したり考えたりできるプロセスを大切にします。
- 楽しい体験、ワクワクできる体験、おどろきや発見の体験を積み重ね
子どもの生きがい、生きる喜びを育てます。
- 常にもっと良い方法、もっと良い教材、もっと良い関わり方、もっと良い経験を模索し、
子どものために努力を惜しまない姿勢を貫きます。



*内発的動機付けとは、「自分からやろうと思うこと」「モチベーションがあがる」ということです。

逆は外発的動機付けと言います。やりたいやりたくないに関わらず外圧でやらされる、ということです。外発的なきっかけが内発を呼ぶこともありますので、一概に「やらせる」のがいけないということではありませんが、できるだけ子どもたちが「自分からやりたくなるように」、子どもの心に働きかけ、誘導しながら活動を進めていきます。

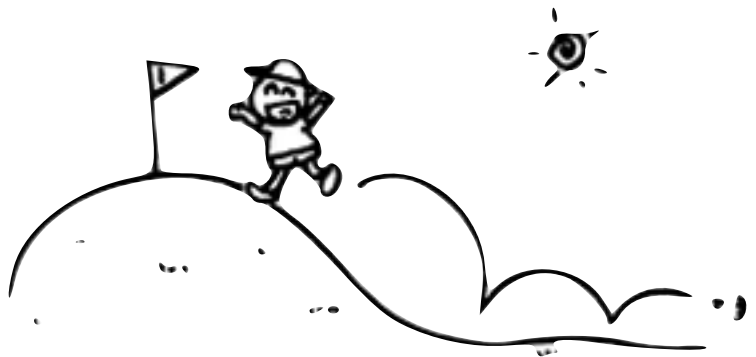
からだ (1) 健康なからだと心を育てます。

子どもの発達には全身運動から、身体の細部へ順番に発達していきます。言葉が上手に出ない子ども、細かい作業が苦手な子どもは、全身での運動を改善すると発達が促進されます。全身運動から細部へ、身体から頭へと発達する自然の法則を守り、運動する環境を与え、からだを動かすこと、運動することを好きになれるよう援助します。



=====具体的には=====

- ◆ 身体の発達や動きを考慮して設計されている固定遊具を活用して子どもたちの遊びを促し、身体の発達を促進させます。
- ◆ 砂場遊び、水遊び、泥んこ遊びは子どもにとって欠かせないあそびです、とくに年少児の時は十分に満足させるまで遊ばせます。
- ◆ 園外保育、散歩に積極的に出かけ、足腰を鍛えるとともに自然にふれる機会を持ち、子どもの世界を広げていきます。
- ◆ 日常的にダンスを行い、歩く、走る、跳ぶといった、運動を効果的に取り入れて足腰を鍛えていきます、「継続は力なり」です。
- ◆ ジャクパスポーツの講師とは密に連絡を取り、跳び箱、鉄棒、固定遊具、ボールあそびなどのカリキュラムを講師任せにせず一緒に考えていきます。
- ◆ 夏は、できる限り水遊び、プール遊びを行い水に親しめるようにします。
- ◆ 健康な身体作りイコール運動ばかりではありません。基本的な生活習慣の習得、挨拶などの生活訓練は、身につけることがその子どもにとって大切なことです。
- ◆ 子どもの状態、とくに病気や怪我に注意し、温度調節やケガの処置など適切な配慮をすることによって、子ども自身も健康管理や怪我の処置の仕方を学習できるようにします。



こころ

(2) 豊かな心・感性、創造性を豊かにのびします。



絵本を読んでもらってドキドキしたこと、嬉しかったこと、感動したこと…心を育てるのは様々な心を動かす喜びの経験です。こんな喜びのファイルがたくさんあるほど、心は豊かに育っていきます。私たちはそのとき、その場において一緒に喜べるよう、いつでも子どものそばで、子どもを見守りながら一緒に遊びます。感性を育てる音楽はいつでも楽しさと共に、リズムとメロディーを大切にすすめます。絵画では、その子の発想や表現を尊重し認めながらすすめます。

=====具体的には=====

- ◆子どもにとって遊びの時間は自分を開放し、自分の創造力をフルに発揮し、発見したり試したり、失敗したり成功したりする“自分自身の時間”です。これがないと子どもはストレスが溜まってきて自分を見失ってしまいます。大切な時間として課題活動とのバランスを考えて日々のスケジュールを考えていきます。
- ◆人にしてもらって嬉しいことは、いつか自分もしよう、と思うものですし、そういう人間になってもらいたいと思います。子どもたちの嬉しいこと、心のこもったことをいっぱい考えて実行していきます。
- ◆誕生会の持ち方、カード、プレゼント作りはその一つです。心を込めると言うことは口で言うのではなく実際に手間をかけて手で作ってこそ伝わるものです。日々の保育準備を圧迫しないよう、夏休みなどを利用して計画的に進めていきます。
- ◆ひんやりした鉄と暖かい木の遊具の肌触り、砂場の砂と泥んこの違い、園庭の木の種類、室内環境、季節…いろいろな環境にふれることによって子どもの感性は育っていきます。ただし、そこに保育者のことばがけがあるか無いかは大きな分かれ目になります。感性を刺激することば掛けができるよう、いつもアンテナを伸ばしておきます。
- ◆音楽を楽しむ心は、楽しい活動を体験することから生まれてきます。先生自身も楽しんで音楽を伝えていきます。
- ◆絵本や紙芝居などファンタジーを楽しむのがいちばん得意な年代が幼児期、大切な時期ですから朝の時間や帰りの時間に絵本や紙芝居を毎日一冊以上は欠かさず読みます。



(3) 人への愛情や信頼感、協調性、あこがれを育てます。

子どもたちの愛情や信頼感は、親や周囲の大人から与えられてはじめて生まれてきます。信頼感が育つと協調性も育ってきます。



=====遊びを通して=====

幼稚園で、先生と子どもが信頼関係を築くのは「あそび」からです。一緒に遊び、子どもが心を開いてくれて、はじめてその子の性格がわかったり、考えていることがわかってきます。自由に遊ぶ時間も保育者は子どもを観察し、誰と誰が仲が良くして誰がリーダーになっているか。どんなあそびでみんなが楽しんでいるか、そしてどんな関わり方をすればもっとあそびが広がるのか、先生は常にあそびの仕掛け人であって主役ではありません。年少時代は個々が楽しむあそびから、3年かけて仲間で楽しむあそびへとあそびを変化させていきます。また、あそびの中で生まれる工夫や集中力に注目し、子どもたちの力や協調性を育てるのも一つの役目です。

=====やって楽しい、見て楽しい行事=====

遊びが子どもたちの見えにくい成長を促すものだとすれば、わかりやすい成長に日々の活動や行事があります。クラスでの活動、グループ活動、当番活動など日常的な中で愛情のはぐくみはもちろんですが、行事を大きく3つに分けて、子どもの成長の場とらえます。

- ①生活の節目、季節行事である行事（参加し、体験することに意義がある）
入園式 始業式 終業式 プール開き 納涼まつり サンクスデー もちつき
やきいも 参観日 親子遠足 ジャンプパーティー
- ②成長の発表の場、あるいは成長を促す場としての行事
誕生会 園外保育 お泊り保育 運動会 マラソン大会 音楽会
お話あそび会 卒園式
- ③その他生活に必要なこととして
避難訓練、内科検診、歯科検診ほか

これら、行事活動というのは個々の活動ではなくみんなで行います。みんなで行うということはある程度足並みを揃えながら行うことが必要で、子どもたちには協調性や、団結、ある程度の我慢、目的に向かった練習や準備が要求されます。それぞれがしっかり目的を持てるように目標を示してあげることが最初に必要です。

成長を目的とした行事を通して得るものに、達成感、共感、感動、楽しさ、そして素敵な思い出ができたりと、心に残るものも大きいものがあります。そして、そこには必ず友だちや、先生、家族の姿があります。自分一人ではできないこと、人と一緒に生きていくことの喜びを感じさせてほしいと思います。

(4) ことばを獲得し、知的好奇心や考える力を育てます。



心が育ってくるといろんなことに興味がわいてきます。「これはどうなってるんだろう?」「どうやったらいいんだろう?」…

園生活ではいろんな場面で自分で考えなくてはならないときがあります。その時に先生がすべて教えたり管理してしまわずに、子どもに積極的に考えさせます。

もちろん、その前の段階として先生の意志や考え、要求がきちんと子どもに伝えられていること、そして意思疎通や思考の基礎となることばの獲得も大切です。

====考える力====

- ◆子「これやって!」 大人「なにをどうしたいの?教えてくれる」
子「なにしてるの?」 大人「みててごらん、何ができるかな」
子「これどうやんの?」 大人「どうやったらいいだろうね、一緒に考えようか」
- ◆これらの受け答えはディスタンス(距離をおくという意味)という対応のしかたです。この方法を用い子どもから出てきた要求や疑問を子どもにいったん返して、自分で、或いは一緒に考える習慣をつけるようにします。
- ◆「これ」「やって」などぶつ切れの会話はもう一度聞き返し、きちんと筋道たてて話せるようにします。時間がかかっても子どもにとっては大切な学習です。日常的に対応を心がけ、考える力を育てていきます。
- ◆考えるという活動はことばが大きなウエイトを占めてきます。年中ではことばの世界を豊かにするための「ばばあちゃんかるたことばをまるごと覚える→楽しむ→使う」というカリキュラムを進めていきます。
- ◆ことばを覚えたら、次は文字としてそれを表現し、人に伝えることにつなげていきます。年長になると生活の中で文字を使う機会を増やすとともに、ワークや郵便屋さんごっこでさらに刺激し、最終的に卒園文集づくりへとテーマを進めていきます。

====好奇心====

- ◆子どもたちが園庭で見つけた自然(葉っぱや昆虫)には十分に興味を示し、その上でもっと知りたい!という欲求に火をつけ、図鑑などで調べる方法や、飼育方法、押し花などにして保管する方法などを提示していきます。
- ◆年長組は自然に関する絵本を題材に体験と結びつけたカリキュラムを展開します。

(5) 自分をコントロールする力を育てます。

早くから文字が読めたり、跳び箱が6段とべる能力があっても、自分のやりたいようにしかできなければ周りの友だちから認められずに孤立してしまいがちです。みんなで楽しむときには一緒に楽しむ！相手のことも考えてあげられる！共存するためには自分の気持ちをコントロールできることが必要です。その場の雰囲気を感じ取って自分の身体も心もコントロールできるようになってほしいと思います。

子どもの生活習慣の自立には「あせらず気負わず根気よく」の気持ちと「投げず流さずあきらめず」の精神がポイントです。いつかできるようになることは確かですが、大人の関わりが無ければいつまでたってもできないことも多いからです。



=====具体的には=====

- ◆生活習慣の確立は身体の発達と密接につながっています。トイレ、脱ぎ着、食事、清潔、そして睡眠の5項目が基本です。失敗して覚えていくものですから、失敗を見守りながら、丁寧にやり方を教えていきます。
- ◆子どもと接するときには、どういう説明をすればその子が理解できて、できるようになるのか、子どもにわかるように言い、伝えていくことがポイントです。大人がやってしまわずに、どこができないのか把握して、できない部分だけ援助することがその子の自立につながります。
- ◆あいさつをしっかりと行います。「おはようございます」「こんにちは」「ありがとう」「ごめんなさい」「いただきます」「ごちそうさまでした」「さようなら」・・・人と人をつなぐコミュニケーションの基本があいさつです。まずは、大人が見本を見せることから、徐々に子どもにも促してできるようにしていきます。
- ◆マナーは相手への思いやりの気持ちを育てます。どうやったら人とうまくやっていけるのか、どうやったら気持ちよくつきあえるのか、どうやったらいけないのか、など遊びの中でトラブルを起こしたり、喧嘩をしたりしながら、人に言い聞かされて頭でわかるのではなく、体験的に自分で理解するように学ばせていきます。
- ◆嬉しかったことは人にしてあげたい、嫌なことは人にはしない、が基本です。
- ◆グループ、遊びのルール、活動のスケジュールを決めたり誕生会の進行を務めたり、子どもを信頼して任せていくことも、やり方を教えてから徐々に進めていきます。



■喧嘩についての方針

ケガや喧嘩は子どもの発達には経験したほうが望ましい経験です。ただ、喧嘩は幼児の場合ほったらかしでは良い経験になり得ないことが多く、良い経験として学習するには大人の適切な関わりが必要になってきます。



幼稚園では年少児の1学期が自己主張のぶつかり合いからいちばん多くケンカが起こり、ことばが発達して自分の気持ちや主張を相手や友だち、先生に伝えることができるようになってくると徐々に回数が減っていきます。

ケンカをして嫌な気持ちを経験することで、次からはどういう態度や言葉で自分の気持ちを伝えたら良いか考えることを繰り返すことで、子どもたちは発達していきます。ケンカやトラブル、嫌な気持ちを体験することも人間関係の大切な学習の機会なのです。

=====具体的には=====

- ◆喧嘩の仲裁は、互角にやり合っている場合はある程度（すり傷程度）までは様子を見ます。（目を離さず、真剣に見守ります）
- ◆年少児の喧嘩は早い段階で止めます。年中長児でも一方的な場合、ものを使っている場合、子どもたち自身で解決できない場合は即座に仲裁します。
そして、できるだけ子どもたち自身で原因や経過、結果を受け止められるように話します。誰が悪い、誰のせい、先にやった、やられたなどに終始せず、お互いがどんな気持ちでどんな行動をしてしまったかを理解し、今後どうしていったら良いかを考えさせます。
- ◆ただし、自分でもなぜやったかわからない子どももいます。その場合は「どうして」と追求しても「わからない」ことがありますから、保育者が気持ちを察して代弁することもあります。
- ◆通りすがりにぶつかったり、手を出したり、物を投る場合があります。反射的にやったり、意識せずに行う場合です。このときは、それが危ない行為だと気づかせることが先決です。

■叱り方の方針

叱ると怒るは違います。叱るのはその子にいけないことを理解させ諭すことです。怒るのは自分が怒っているんだぞという感情を見せて、相手の行動を抑制する行為です。幼稚園では「叱る」ことで子どもたちに気付かせていきます。

しっかり叱ることができること、これは幼稚園でも家庭でも同じです。

◎大人が真剣に叱らなくてはならない場合。

①危険な行為をしたとき

道路に飛び出したり、高いところから人を押したりといった危険な行為です。命や怪我に関わることは、真剣に本気で叱ります。

②他人を傷つけたとき

怪我をさせたり、汚いことばで相手を罵倒したりからかって精神



的に傷つけたときも含みます。ふざけて使ったとしてもいけないことをしっかりわからせ、どう言うべきかを教えます。

③集団を乱したとき

たとえばみんなでお集まりをしているときに騒いだり、邪魔をしたときには、まずは言い聞かせます。それでもわからない場合は「自分は損をするんだ」ということをわからせます。幼稚園ではその場から出てもらったり（フリーの保育者に預けるなど）、みんなと一緒に活動が出来ないなど『みんなが困っていた状況を自分も体験する』ことで、相手の気持ち、周りのみんなの気持ちがわかるように促します。

※反省後は状況を見てあとからでも同じ活動ができるように配慮します。

◎叱るときに大人が守るべきこと

- ◆言うことを聞けなかったり、約束を守らなかったり、ふざけていたり、いろいろ叱られる場面はありますが、時と場合を考慮したり、なぜそうなのか理由を聞いて大人側に落ち度がなかったか検証し、できるだけその場で叱ります。
- ◆叱るという行為で感情的にならないように注意します。叱り方は短時間に集中して行い、終わったあとは何事もなかったように子どもと接します。
- ◆強い体罰を与えたり、閉じこめたり、脅したり、からかったりする行為、呼び捨て、本人が不愉快に思うあだ名で呼ぶことは一切してはいけません。
- ◆本人の人格を否定するようなことばは避け、行為そのものの不適切さを気付かせます。
- ◆失敗してこぼしたり、うまくできなかったときは叱るよりも、むしろ励ますことが適切です。

■ほめるときの方針

「いいこだね」という抽象的で漠然としたほめ方ではなく、その子どもがやった行動に対して「○○をしてくれてありがとう」「○ちゃんに任せるとほんとにじょうずにやってくれるね」「きょうはよく我慢できたね、えらかったよ」というように具体的に、次にもやる気が出るようにほめます。

- ◆子どもが何かにチャレンジしたとき、できたとき、先生のお手伝いをしてくれたとき、がまんができたとき、友だちに良いことをしてくれたとき、いつでもチャンスを見つけて躊躇なくその場で心から精一杯ほめます。
- ◆ただし、子どもにも実感がないときにはオーバーにほめるのはいけません。 そんなときは励ますことを考えます。

◎大人の関わりは3H《ほめる、はげます、ひろげる》を心がけましょう

“ひろげる”とは、こどもの視野や思考が広がることば掛けをすることです。

すぐに答えを言ってはいけません。

たとえば「どうしてちょうちょは飛べるの？」と聞かれたときに、「羽根があるからだよ」なんて答えたのでは無味乾燥でなんの広がりもありません。「どうしてだろうね?」「よく見てごらん」と、こどもが観察したり、考えることを促し、出てきた答えを「そうだね」と受け止めることで、こどもは自分で考えることを楽しいと感じてきます。

《原町幼稚園の奨励事項》

子どもたちのより良い発達のため、
次の事項について園と家庭で協力して取り組んでいきたいと考えます。
それぞれのクラスでも担任の奨励事項がありますのでご協力下さい。

1.運動を活発に！

晴れた日は外で遊ぼう！を合言葉に、歩く、走る、跳ぶ、の重視。散歩や屋外活動を積極的に行い、足腰、身体能力の強化を促します。園庭の環境もからだの発達を促し、自分で危険を感じ、自分の力で回避できるようになるために、ある程度リスクを感じられる環境を設定しています。

2.レスポンスのよい態度と姿勢！

あいさつをはじめ、聞かれたことや呼びかけにしっかり応える。
自分の気持ちをはっきり言えることを目指して、サークルタイムなどの話し合いの機会を作っていきます。ものごとを始める前、終わったとき、行っているとき、姿勢を正して行うことを心がけていきます。

3.ものを丁寧に扱う。

身近なもの、大切なものを丁寧に扱うように心がけます。まずは履き物を揃えましょう！

4.ポジティブな物言いをしましょう。

「どうせむり」は禁句！○○できないとダメだよ…というネガティブなアプローチではなく、「やってみようか」「こうしてくれると嬉しいな」「おもしろそう（な考え）だね」と、子どもの発想を大切にしながら、ポジティブな思考回路を形成していきましょう。

3H（褒める、励ます、広げる）を大切に！

5.寛容力を高める。

社会が“不寛容”になってきていると感じませんか？不寛容が進めばみんなが窮屈になってきます。子どもの社会では理不尽なことがいっぱい、でも「ごめんね」「いいよ」で解決です！そこが子どもの良いところ、決着したらお互いが気持ちよく過ごせる経験を積んでいきます。大人も見習いましょう。

子どもたちの教育は、
目標を定めて家庭と園が同じ方向を向いて
子どもたちを育てていくことによって、
より教育効果が上がっていくと考えます。
お互いに協力しあって子どもたちの健やかな発達を援助していきましょう。
また、幼稚園での思い出が子どもと家族の人生の根っこの力となるよう、
楽しい思い出、がんばった思い出、くやしかった思い出
うれしかった思い出・・・
皆さんと一緒にたくさん作りましょう。

園長 鶴谷主一



学校法人松濤学園
幼稚園型認定こども園
原町幼稚園

〒410-0312

静岡県沼津市原199の1

☎055-966-7338 fax966-7370

mail:osakana@haramachi-ki.jp

twitter:haramachikinder

<http://www.haramachi-ki.ed.jp>